



**全校研究主題** 子どもが主体的に活動する姿を目指した授業づくり  
～一人一人の「できる状況づくり」と各教科等の視点をふまえて～（2年次）

**寄宿舍研究主題** 子どもの主体的な活動と育ちにつながる生活づくり  
～人とのかかわりの中で豊かな心を育みながら～（2年次）

第3号では、2学期以降の取り組みと今年度の研究のまとめを紹介します。

## 中学部 公開授業研究会を実施しました（12月10日）

提案授業：中学部知的障害学級2年生

生活単元学習『おにぎりと豚汁で「おもてなし会」をしよう！』

協議の柱：①おもてなし会で、子どもたちが主体的に活動できる状況が整えられていたか。

②事例対象生徒Aさんのねがい達成できる手立て（できる状況づくり）がとられていたか。

講師：西九州大学子ども学部子ども学科 准教授 久野 隆裕先生

研究会当日は、外部参加者（10名）と各学部の職員を交えたグループで柱に沿って協議を行いました。グループ協議後の全体協議では、単元間のつながりや子どもたちが自分で判断して活動できる手立て等、様々な「できる状況づくり」がなされていることや、Aさんがより活動しやすい手立ての工夫等について、多くの意見交換をすることができました。

久野隆裕先生による指導・助言では、中学2年生という生活年齢を意識した授業づくりの大切さや生活単元学習における各教科等の取り扱いと、教科別の指導との関連等についてお話しいただき、大変学びの多い授業研究会となりました。



おもてなし会大成功！



グループ協議

## 小学部・高等部で行った授業研究会の紹介

『授業計画シート（小学部は指導略案）』と『個人のねがいシート』を使って授業研究会を行いました。

### 小学部

#### ◆9月単元（9月19日）

肢体不自由Ⅱ課程3・5・6年生  
生活単元学習  
「おかしー1グランプリ」

#### ◆11月単元（11月21日）

知的障害学級2年生  
生活単元学習  
「きらきらランドをつくろう！」

「できる状況づくり」や主体的に活動する子どもの姿について、協議をしました。単元や個人のねがいに含まれる各教科等について話題にしたことで、各教科等を合わせた指導について理解を深めることにつながりました。

「できる状況づくり」や単元に含まれる各教科等の内容について協議をしました。子どもの様子に合わせた補助具作りや場の配置、それらの改善など具体的な「できる状況づくり」について考えることができました。

### 高等部

#### ◆12月単元（12月26日）

知的障害学級2年生  
生活単元学習  
「門松でお正月を迎えよう！」

研究の柱に沿って、生徒のできる状況づくりや単元のテーマについて協議をすることができました。生徒の経験のつながりや季節を踏まえた「子どもの思いに即したテーマ設定」を行うこと、高校生としての役割を意識した「生活年齢にふさわしいテーマ」へつなげることのよさを共有することができました。

## 2年次の成果(○)と課題(△)

- 年度初めに合同学部研究会を実施し、「各教科等を合わせた指導」の授業づくりについて演習を交えながら学んだことで、職員でアイデアを出し合って授業をつくる面白さやテーマに沿ったまとまりのある授業づくりを経験することができ、その後の授業づくりにも生かすことができた。
- 『授業づくりの進め方』や『授業計画シート（または指導略案）』の活用については、学部研究会で時間を確保することで、資料を見たり、シートをもとに授業について話し合ったりすることができた。
- 「できる状況づくり」については、年度初めに各学部で詳細に説明をしたり、各学部の授業研究会や公開授業研究会等で話題にしたりしたことで、「できる状況づくり」を意識して授業をすることが増え、子どもが主体的に活動する姿へとつながってきている。
- 『個人のねがいシート』を作成したことで、子ども個人の「自立活動の指導のねがい」に目を向けることができた。また、個人のねがいを「育成を目指す資質・能力」と各教科等の視点で詳細にとらえることができ、ねがいや手立て、評価が具体的になってきた。
- △「各教科等を合わせた指導」の中に含まれる各教科等の内容を考えるようになってきたが、自然な形で取り入れるということに難しさを感じているという声がある。
- △『個人のねがいシート』については、時間の確保が難しく、作成はしたものの授業者で検討したり共有したりすることが十分にできなかったケースが多くあった。

## 寄宿舎の取り組みについて

- 1 一人ひとりのニーズや思いを充分汲み取るための手段や場の確立
  - ①事例研「あーだ、こーだ」に、新たに担任や関係者の参加を呼びかけ、多角的な視点からの支援と連携の在り方を探る
  - ②担当同士の話し合いの週「大人の部屋会」を設定し、担当間で子どもの思いを深める
- 2 舎生の生活が忙しくならないための調整機能を設定
  - ①子どもの年間計画表を作成し、各分掌部や棟での活動全体の取り組みスケジュール調整ができる機能を持てるようにする
- 3 「見取りの大切さ」「できる状況づくり」についての共通理解および、子ども同士の仲間意識を大切にしたい活動の実践

### 【成果】

- 「できる状況づくり」や「見取りの大切さ」の共通理解が進み、職員の意識が「こうあるべき」という見方から柔軟に変化してきた。それによって子どもたちの行事や係活動内容の見直しがおこなわれ、子どもたちに時間と心のゆとりができた。
- 子どものニーズや思いを汲み取る手段として、今年度から新しく取り入れた事例研「あーだこーだ」への学校からの参加や「大人の部屋会」など、子どもを取り巻く大人たちが深く連携を図ることで支援の見直しや情報共有ができ、より子どもに寄り添った支援につながった。
- 寄宿舎生活を通して、子ども同士でフォローし合ったり、カバーし合ったりする場面も多く見られ、ゆっくりでも、小さなことでも、失敗しても、温かく認めようとする意識が芽生えている。行事や様々な活動を通して、人の役に立ち、周りに認めてもらい褒められたり、励まされたりしながら達成感や喜びを感じている子どもの姿が見られた。

### 【課題】

- 支援度の高い子どもが増えたことで、ある程度自分のことができる子どもに対して関われない場面があった。会議等で職員の人数が少ないときには、安全面を優先し外遊びに行けなかったり、「主体性」を引き出すために子どもと一緒に試行錯誤する時間自体が少なくなったり、余裕がなくなることもあった。
- 適切な見取りについては、職員それぞれが持つ「価値観（見取り）のものさし」で子どもの実態を捉えているところもあり、見誤ったり、迷ったりする職員もいた。実態を評価する仕方や入舎期間（1年後）だけでなく、中長期的な視野で支援を系統立てる力を今後つけていきたい。